

モオリス・ド・ゲランの日記

増 永 清 明

私がゲラン姉弟の名前をはじめて知つたのは、堀辰雄の紹介によつてであつた。(それは、たしか「かげろふの日記」の序文ではなかつたかと思う。) その「ゲラン」という名のひびきから、私は彼女らの遺していつたものを、ひそかに想像したばかりであつたが、その期待はしかし、その後發表せられた「ユウジエニイの日記」(堀辰雄訳)によつて少しも裏切られなかつた。彼は更らに、弟モオリスの日記の中から、二つの断章を抄された。

それを手にした時、大へんなつかしい思いがせられたのはそこに描かれている荒涼とした北仏の海岸の魅力は、恰も幼いマルセル(「失われし時」の語者)が、あんなにもそれに接することを熱望しつゝ、いざという時になつて、病氣のために断念しなければならなかつたものなのである。(土地の名)

モオリス及びユウジエニイの人と作品については、同じく堀辰雄の魅力ある覺書が残されている。

▲モオリス・ド・ゲランはラングドックのシャトオ・ド・ケエラに一八一〇年八月五日に生れた。姉のユウジエニイはそれより五年前、一八〇五年一月二十九日に生れた。美しい南仏の空の下に、貧しいけれど古い由緒のある貴族の家に生い立つたモオリスは、早くも六つのときに母を失い、その後は姉のユウジエニイの手で育てられた。シャトオ・ド・ケエラは遠くに溪谷を見おろす人氣のない台地にあり、モオリスはその森などで姉とともに夢多き少年の日を過ごした。十一のとき彼は故郷を離れて、トゥルウズの小神学校に入つた。そのときから姉のユウジエニイとの間に後に有名になつた文通がはじまつた。十四になるとさらに巴里に送られてコレージュ・スタニスラスに入つた。古典を修めんがためである。学友にはバルベイ・ドオルヴィイなどがいた。そしてそこに五年間勉学をし、その間ケエラには一度も歸らなかつた。一八二九年の夏はじめて帰省し、ひさしぶりで家族のも

のと共に休暇を過したのち、再び巴里に出た。そこで一八三二年四月業を了え、ケエラに帰つてきたのは二十二のときであるが、いまはもう昔のような信仰を失い、人生を前にしていかにも不安に堪えないような、傷心愛思の青年になつてゐた。十月までケエラで過し、ユウジエニイと共にその親友ルウイズ・ド・ペエヌを訪れてシャトオ・ド・レザツクに客となつたりしてゐた。彼が心の危機を深く感じて「日記」を書きはじめたのはその間である。……

手稿は更らにつづくのであるが、私たちはここで一先ず足をとめて、「緑の手帖」という副題をもつ、モオリスの日記を縮くことにしよう。

ケエラにて、一八三二年七月一日

もうやがて三月半、……田舎に、父上の許に、at home (わが家のすべてを要約するなんとまあ心憎い英語の表現)、なつかしい地平線の中心に、帰つてから。

私は春を見た、春はのびのびと自由に、あらゆる拘束から解放されて、思うさま花と緑とを撒きちらし、いたずらつ子の^{コトラス}ようにわれわれの丘や谷間を駆けめぐつてゐる。崇高な觀念と優美な幻想をくりひろげ、さまざまの様式を比較し、対照を調和させるその手際は、巨匠のひそみに倣つてというよりは、彼らにお手本を示そうといわんばかりだ。

私は林の奥だの、小川の縁やら、丘の背なんぞに腰をおろ

した。幼いころ、なんの屈託もなく敏捷に歩きまわつたあらゆる場所を再び訪れた。今日、私はそれらの地点を力をこめて踏みしめた。私は、私の最初の足跡に断ちがたい愛情をかんじた。私はひたむきな、敬虔な思いで、再び私の巡礼を始めた、思ひ出の数々をとりあつめながら、それらの風景の最初の印象に私の魂を捧げながら。

三〇日―最早読む必要のない本もある。まるで自分の心が死んでしまつたかと思われる、気の滅入つた日、心情の涸渇した日に、私は再読すべく「ルネ」を選んだ、それが、ひとつの魂の上に及ぼす、すべての力を試めそうとして、そうして私はそれがどんなに大きな力を持つてゐるかを知つた。この読書は驟雨のように私の魂をうるおしてくれたのだつた。私の最初の読書、十六才から十九才までの間に夢中になつて読みふけた本、に再びかえることに、私は無限の魅力をかんじる。私の青春の、いまは殆ど涸れ果てた泉に、涙を汲むことを私は好む。

八月四日―今日は私の二十二の年の最後の日。

私は屢々巴里で目撃した、子供たちがごく小さな柩に納められて奥津城へ運ばれるのを、そしてそらやつて群衆を横ぎつてゆくのを。

ああ、私は何故その子供たちのようにこの世を横ぎつて、無垢の柩に身を埋め、一日の生を忘れ去らなかつたのだろう！ あの小さな天使たちは地上のことは何にも知らない。彼

らは次に生を享ける。父上は、幼い時分に、私の魂が唇の上でいまにもとび立ちそうにしているのを見たと言ふ。神様と、そして父上の愛情とが、私の魂をひきとめて、生の試煉に耐えさせ給うたのだ。神と父への感謝と愛、でも、あのまま昇天していたら、と思うと、この人生という廻り道をしなければ、彼処へ到達できないのは何と残念なことだろう。

一三日―私は弱い、迎も弱い。聖籠ゴラアスに伴われるようになってからも、ひとり立ちのできない幼児のように転ぶことが幾度あつたらう。私の魂は想像も及ばぬほどか弱いのだ。その弱さの自覚が私に避難所を求めさせ、いつそう確実に神のみもとにとどまるべく世間と袂を別つ力を私に授けてくれる。

が、ほんの一日か二日、巴里の風にさらされただけで、私の決意は吹きとんでしまうのだ。それ故、その決意を秘めかくし、安全な場所にかくまわなければならぬ。逃避を必要とする人びとのために開かれた隠れ家のうちで、あの、学識と敬虔な想念に充たされた、ラムネエ氏の住居ほど、私にとつて好ましいものはない。

そのようなことを思いめぐらすとき、空しく費した自己の生活に慚愧の念を覚えずにはいられない。私は自己の品位を傷けてしまった。

幸い、私の魂には二つの部分がある。悪の中へは半分しか浸らない、私の半身が地上を這いまわつてゐる時も、他の半

身は、どんな汚濁にも染まず、高くきよらかに自らを持して、神が時を借し給うならば、やがて湧き出すべき詩ポエジイをひとしくづつあつめている。私にとつてはすべてがそこにあるのだ。私は詩にすべてを負う。私の思念の全体をいいあらわそうとすれば、詩ポエジイというよりほかないのだから。

私が今もなお魂の中に所有する、純粹な、高貴な、堅固なるものすべてを詩に負うている。私の得た魂の慰めは、悉く詩に負うものであり、恐らく私の未来も詩に負うであらう。

I……に対する私の友情は……学院コレージュの時代には何と無軌道な、そしてはじめて世の中へ出た時には何と狂気じみたものだつたらう……が、今ではそれが強固なものであることをかんじてゐる。われわれの友情は、時とともに重味を加え、熱れた果実の如くに甘美なのだ。

ここで日記はしばらく絶えるのである。再び前さきの覚書を披いてみると、

「あたかもそのときブルタアニエのラ・シエネエに隠棲せるラムネエが、彼の主張する加特力教上の新しい教義に参する若い弟子たちを集めていた。モオリスもその膝下に加わる決意をなして、再び故郷を離れた。彼がラ・シエネエに著いたのはその冬（一八三三年）のはじめであつた。その当時の彼の手紙や日記には、「ブルタアニエの古い森の中で汝々とし

て学ぶことの異常な強い魅力」のある其地の隠棲生活が印象ぶかく語られている。彼は同時にH・ド・ラ・モルヴォオネエやF・ド・マルザンなどのよき友を得て、彼等との交友によつても文学上の影響を大いに受けた。しかしそのとき師ラムネエにはまさに重大な危機が迫つていた。その有力なる同志ラコルデエルは遂に彼と袂を別つて去り、羅馬はその宗教結社の解散を命ずるに至つた。三三年九月ラ・シエネエ解散のあと、モオリスはなおブルタアニユに止つてヴァル・ド・ラ・ルゲノンに気持の佳い家と美しい妻をもつた詩人イポリツト・ド・ラ・モルヴォオネエの許などに冬じゆう滞在していた。▽

ラ・シエネエにて、一八三三年二月六日

ゲエテの「回想録」の第一巻を読みました。この書はさまざまの印象を私にあたえた。マルグリットや、ルチンデ、フレデリカのことで私の想像力はいたく刺戟せられた。クロプシュトツク、ヘルデル、ヴィイラント、ゲレルト、グライムビュルゲル、——十八世紀の中葉に於る、かくもみごとな、そしてかくも国民的な独逸詩壇の興隆、ゲルマン民族の頭腦が宿せるかかる思念の醗酵、には極めて興味深いものがある、就中、独逸にとつてかくも実り多く、かくも光輝に充てる現代に於て。

併し、彼の国に於る青年の教育の細目と、彼らの知的進歩

の階梯をあとづける時、ふと舌を刺すような思いが湧き上つてくる。この苦さは我国の教育との比較から生ずるものである。私は学校で十年の歳月を費消した。そしてそこから、ラテン語とギリシャ語の若干の断片と、倦怠の巨きな塊りを持ちかえつた。仏蘭西に於る学校教育の成果はすべてほぼこのようなものである。

ひとは青年達の手に古代の作家を載せる。それはよろしい、だが、彼らは古代を識り、古代を味得する術を教わるのであるうか？

ひとは嘗て彼らに、この壯麗なる文学と、古代民族の所有せる、自然、宗教上の教理、哲学体系、美術、文明との諸關係を展開してみせたであらうか？ 彼らの知性を導くに一族の文明の所産を悉く結合せんとする、一個の美しい連環を以てし、これを以て、あらゆる細部が相互に触れあい、反映しあい、説明しあう、至妙なる統一体を構成せんと試みたであらうか？

いかなる教師が、ホメロスやヴィルギリウスを講じつつ、ギリシヤやイタリヤの空の下に於る自然の詩によつて「イリヤス」や「アエネイス」の詩篇を敷衍したであらうか？ また、何人が夢想したであらうか、詩人を哲学者によつて、哲学者を詩人によつて、詩人を美術家によつて、プラトンをホメロスによつて、ホメロスをフィデアスによつて註釈せんとなつて？

ひとはこれらの偉大なる才能を孤立せしめ、一個の文学を解体する。そしてわれわれの前に、ばらばらになつた肢体を投げ出すのである。そして彼がそれらをぬき出した一個の大きな有機体の中で、それらの占めていた位置や、それらが保持していた關係を説明しようとはしない。

子供たちは挿絵を切り抜くのが好きだ。彼らは巧みに一人の人物を切りとる。彼らの缺は正確に輪廓を辿る。そうやつて切り離された群像は、子供たちの間で分配せられる。何故ならめいめいが一個の画像を所有せんと欲するからだ。

われわれの教師たちの仕事も、この子供らの遊びに似ていないだろうか？ 斯くして彼を取り巻く周囲の凡てから切り離された一人の作家は子供たちの手で裁断せられ、画面全体から引きぬかれ、陰影を失つた人物のように理解し難いものとなる。その結果、学習が内容の空疎な不充分なものとなることは驚くに当らないであろう。殆ど意味を失い、生命を喪失した文字に、長い間かじりついていたところで、何が得られるであろう、学習に対する嫌悪と反感に非ずんば？

独逸では、これに反して、広汎な哲学が文学の研究を司どり、青年達の初歩の学業の上に、学問に対する情熱を保持せしめ、發展せしむべき、香り高い抹油を注いでいる。

さあ、元氣を出そう！ 私は慣れつこになつてゐる。告別に、別離に！ おお、しかし、今度はあまりにもつらい。いや、そんなに辛いことではない、なぜなら、どんなに大きな

不幸であろうと、それに堪えるだけの能力をわれわれの魂の中に育てないような不幸は存在しないのだから。

私は苦しむであろう、しかし約束は守るつもりだ。(未完)

〔原文はテキスト・フランセ版モオリス・ド・ザラン全集第一巻に拠る〕
(本学助教授)

成城文藝 第二号 目次

幸田 露伴

高田 瑞穂

ポール・モレルと三人の女性

高城 檜秀

— D・H・ロレンスについての解説的な批評(一) —

『奥の細道』小見(二)

板 坂 元

封建時代の女性像

茂手木 恵子

— 近松の「おさん」をめぐる —

文学研究の根本問題

坂 本 浩

感動と古代史(一)

今井富士雄

— 福士幸次郎先生に —

忘れられぬ先生方(二)

山崎 匡輔

— 林久重先生のこと —

初期訪日英人の日記

佐野 英一

価八〇円・送十六円